
終わりにから始まる物語

ねむこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わりにから始まる物語

【Nコード】

N6655M

【作者名】

ねむこ

【あらすじ】

笠鷺みなもはトリップものが大好きな・・・19歳。女子高生でなくてももしかしたら・・・？そんな彼女がある日気がつくところには怪しい台座の上だった。ここはどこ？もちろん異世界！な嬉しい展開に独特なテンションで立ち向かう彼女の明日はどっちだ！（7/21 01 召喚を少し直しました） 不定期更新です

00 主人公紹介（本文ではほとんど触れない可能性が・・・）

笠鷺 みなも（かささぎ みなも）

19歳。黒に近いこげ茶色の髪に黒目。

身長は156センチで標準体重の中でもやや細め。胸もフツースイズ。

いつでもトリップを夢見ていたため体型と服装には気を配っていた。

髪のは長さは肩まででシャギー入り。

今日は半袖の黒いTシャツに、白とライトグレーのストライプ膝下スカート。

靴はローヒールサンダル。夏なので素足。

天涯孤独で恋人もいないと豪語するけっこう苦労してきた未成年。表面的な付き合いのある友人が数人いる。

トリップできれば一生の思い出として生きていけると思っている、ちよつとイタい子。

01 召喚（前書き）

初投稿の初心者です。拙い文章ですがよろしくおねがいます。
7 / 21 少し直しました。

01 召喚

ぴっかー！ららんらー

端的に言えばこんな感じだった。

それが真っ白い光の中なのか白一面の世界なのかわからないうちに、気がつけば変な台座の真ん中に立っていた……ということは。

こんなバカげた状況に憧れること幾星霜。

いつからだったかその手の本を読み漁っては召喚に必要なものはなんなのか常々模索していたのだ。

この年になるまで。

ずっと胸元に拳を引き寄せると斜め上を見つめる。

笠鷺みなも、19歳。

いま、わたしは旅立ちます。

「おい、お前、どこを向いてしゃべっている？」

その声にはたと視線をめぐらせれば、全然まったくこれっぽっちも見たことのない絶対知り合いではない少年が、腕を組み尊大な態度で立っていた。

真っ黒なマントに真っ黒な上下。

真っ黒な髪に……薄茶の瞳。

……あう。

こういうとき瞳は赤か金であってほしかったのに。しかも見るからに年下。実に惜しい。

「・・・はああ。」

全身をじっくり眺めまわしてからの、さも期待はずれだといわんばかりのため息に目の前の少年の機嫌が悪くなったようだった。

「何者だ？どうやってこの部屋に入った？返答しだいでは・・・」

眉間にしわを寄せて右手を僅かに掲げる。

なんだか物騒な空気を醸し出す少年に、その年でこのキレイさはないと思った。

見た感じ年下、中学生くらいかと思っていただけ、この様子ではもう少し下かもしれない。

これで万が一同い年とか年上だったときは、この世界から早く帰してもらおう。

そう心に誓うと、いまだにこちらを睨みつけている瞳を静かに見返す。

「・・・ねえ、ちょっとまって。たぶんここは異世界だと思うの。」

まったくもって知らないものだらけだった。

この変な台のある部屋は8畳くらいの広さで総じて灰色の石できており、変な台座も黒めの石の表面に何らかの模様が彫つてあるだけの至つて地味なもの。

部屋にある明かりはぼんやり光るランプだけで、窓も扉もなく今が昼か夜かもわからない。

ふむ。

よくよく見ればこの少年、将来が楽しみな顔立ちである。

すっと通った鼻筋にわずかに吊り上った眉と目じり。

ちよっと丸いほっぺは幼い証。

こっちの世界の“普通”がどの程度なのかはわからないがモテない顔ではないだろう。たぶん。

わたし個人の好みでいけば好きの部類に十分入る見た目ではある。まあどう見ても平均点なわたしとは釣り合わないのだけど。

ということで、この子には“鑑賞用”のマークの入ったシールを貼り付ける。心の中で。

しかし目の前で何やら考えこんでいる様子の少年に呼びかけようとして軽く困ってしまった。

名前も知らない美少年に「ねえ君、」なんて口にするのは、どうしてだか変態っぽい気がしたから。

・・・。。

やっぱり何度考えても「ねえ君、」の後に続くのがどれもこれもアブナイものしか浮かばない。

いくらなんでも来た早々“変態”と見なされるのは嫌だ。

ここはやはり名前をお聞きするのが妥当だと思う。

とすると・・・パツと見、ツンか俺様としても『他人に名を尋ねるときは自分から名乗るべきではないのか（疑問符はつかない）』なんて言われるのがオチだ。

フラグは立てられずとも嫌われたくはない。

そう意気込んで俯けていた顔を上げ、なるべく真面目な顔をする。

「・・・よ

「わたしの名前は笠鷺みなも、19歳。性別は女。成績は中の上。剣も魔法も使えない、多少馬にのれるくらいの親兄弟親戚恋人なしの一般人で・・・」

美少年くんがほぼ同時に何か言いかけたが、わたしは心に決めていた自己紹介を一息に吐き出した。
自分でもなんて使えないやつだろうと思う内容だったが、変に期待されては身の危険に晒されるのだ。

つまり。

「勇者と生贄は無理よ？」

何のために喚ばれたのかは知らないけれど、たいていは自分たちで解決できない何かのためなはずだから。

できることとできないことは、はっきりさせたい方がよいと思っていた。

01 召喚（後書き）

ここまでお読みくださりありがとうございました。

02 王子

「勇者も生贄も特に求めていない。」

眉間にシワをよせ、不審そうな顔でそうはつきり告げられて、とりあえず生命の危険はないことを知る。

ほっと安堵の息をついたのも束の間だった。

美少年くんの口の両端がきゅっと持ち上がる。

「私はアーシェントウワ大陸で最大を誇るアーベルエスト帝国の第三王子、フラウス・リドル・アーベルエスト。」

ようこそ、不運にして幸運な異界よりの客人よ。突然のことに心配はあるうがあなたのことは私が保護しよう。」

美少年くんの作り笑顔はとても怖い。

そんなこと身をもって知らなくてよかったのに。

目が笑ってない美少年くん、改めフラウくんを見つめかえす。

「こ、こちらこそよろしくね、フラウくん。」

ぎこちない笑みで、どうやらお世話になりそうな彼に挨拶する。

その瞬間、ぴくりと器用に片眉だけ上げてフラウくんは笑顔のまま目を細めた。

「フラウ、くん？・・・私の名はフラウスだ。呼び捨てでかまわん。」

「うん、わかった。じゃあフラウ、わたし元の世界に帰れるかな？」
「だからフラウスだと・・・はあ。善処はしよう。」

ぶいっとそらされた顔はどこか呆れを含んでいるようだったけど、わたしにはその顔を観察している余裕はなかった。

フラウは帰れるっていわなかった。

“善処する”とは現時点で帰る手段がないことを表しているんじゃない？

うーん・・・ま、いつか。

きつとどうにかなるよね。

うん、と一つ頷いてからこちらをじっと見ているフラウに視線を合わせる。

先ほどから少しずつ肌寒くなってきた。

もしかしたら日が沈んだのかもしれない。

「ねえ、ここ少し寒いんだけど他の部屋にいかない？」

腕をさするようにしながらあたりを見回し、ぶるつと震える。

石造りの部屋に暖房器具のようなものはない。

「・・・だからお前は不運にして幸運だといったのだ。不運だったのはこの時間に偶々お前がここへ来たこと。幸運だったのはこの部屋に私がいたことだ。本来、この場所は立入禁止だ。」

・・・それはつまり、わたしがこの出入り口のない部屋でたれ死んでいた可能性が一番高かったということでは・・・？

驚愕の新事実に目玉が落ちるんじゃないかというほど目を見開く。

ついでフラウに駆け寄ると、わたしの勢いにおされたような彼の両手を取りぎゅっと握り締める。

「ありがとうフラウ！ここにいてくれて！！」

その手をぶんぶん振りながら、わたしを召喚したのはフラウではな

か
っ
た
の
だ
と
理
解
し
た
。

03 下僕

あのあと、フラウが呪文のようなものを呟くと部屋の様子が一瞬でかわって、暖かい部屋に「移動した」と言われた。

魔法がある。

やっぱりファンタジー世界なんだと、少し興奮気味のわたしにフラウは言った。

「ふむ、お前は魔力がないな。」

な、そんな馬鹿な！

お約束はどこへいった！？

すっごい魔法が使えるようになって左うちわでウハウハではなかったのか！？

よろり、とよろけた足が何かを踏んづける。

「いてっ！」

その声にぎよっとして振り返れば、赤茶の髪に青い瞳の男が少し涙目で立っていた。

見たところ20歳くらいで、汚れ一つない白い騎士服のようなものが目に眩しい。

髪はくせ毛なのかあちこちとんでて、目のあたりまでの前髪を6：4くらいでわけている。

吊り目加減が猫を連想させる男だった。

「ごめんなさい！」

一応年上そうなのと初対面なので、慌ててそこからどくがばりと頭を下げる。

白い騎士服の裾は膝まであり、その下には白いズボンとベージュのブーツがのぞいていた。

そしてその腰にある剣の柄と鞘を見てさらにファンタジー感がアツプする。

「いいえ、後ろに立っていた俺が悪いんです。気にしないでください。」

その言葉にゆっくり頭を上げると、にこつと笑って片手を差し出す彼にわたしも笑顔で片手を差し出した。

「はじめまして、ウォレス・マーノスです。こんな素敵なお会いできて光栄です。」

「笠鷲みなもです。こちらこそよろしくお願いします。」

ぎゅつと手を握って、さらににこにここと笑うウォレスさんは爽やかだった。

次の言葉を口にするまでは。

「俺、ご主人の下僕に立候補してもいいですよね？フラウス殿下？」

・・・うん？

何かいま耳慣れない言葉が聞こえたような・・・気のせいかな。うん。

なぜか引き攣る頬でフラウを見れば、やる気なさげに頷いていた。

「ああ、元々お前に頼むつもりだったしな。住まいは南区の緑の館をつかうといい。」

どうやらお家をゲットしたようだが一つ大きな問題が・・・
気にしたら負けだ。うん。

どこかぼんやりしているとフラウに「承知しました」と答えたウォレスさんが、いまだ繋いだままの手をもう片方の手で包み込んだ。

「このウォレス＝マーノス、ご主人によるこんでいただけよう身も心も精一杯尽くしてお仕えますね！」

04 魔王

テーブルの上のお皿には瑞々しい果物らしきものがのっている。
山吹色をして表面はつるつるのぱつんぱつんだ。

形は丸く、へたはひよろひよろと細長く濃い緑色をしていた。

先ほどフラウがメイドさんと呼んで持ってきてもらったものだ。

フラウを見て食べ方を真似しようとすると、横から手が伸びてきて
その果物のへたをきれいに取る。にっこりと。

・・・ウォレス。

邪魔じゃない。

邪魔じゃないんだけど・・・なんというか、居た堪れない。

今までこんなことされたことはないし、こんなふうに誰かがずっと
傍にいたこともない。

わたしは初めてのことに始終動揺しっぱなしだ。

いくらなんでも果物くらい自分で食べられると言ってみたが、ウォ
レスは笑顔で抗った。

いじめか？

これは新手のいじめなのか？

ウォレスがへたを取った果物は甘酸っぱくて美味しかった。

別にウォレスがへたを取ってくれなくても美味しさに変わりはない
と思うけど。

恥ずかしさのあまり顔が熱い。

絶対真っ赤な顔をしているだろうと思いつつ、沸騰し
そつな頭で話題を探す。

「・・・あ！そつ、そつだ！魔王は！？この世界に魔王はいるの！
」

そう、たしかにこれは大事なポイントだった。
ファンタジーならいてほしい。

それもクールビューティーなのが。

・・・戦うのは断るけど。

テーブルの上に身を乗り出し、フラウを見つめる。

「あ？ああ、魔王なら西の山にいるぞ？」

その言葉にやった！と喜んだのも束の間、フラウはどこか尊敬の眼差しで口を開いた。

「魔王は西の山で寒さと病気に強い植物を研究している。主としては農作物で、お前の食べているティーレの実もその成果だ。」

わたしは愕然とした。

この山吹色の果物はティーレの実という名前でわたしの好物リストに堂々のランクインを果たしたこのティーレの実は魔王さまが品種改良したと？

いいひとだな、魔王さま。

おかげで勇者がいらない理由もわかったし。
できることなら一度お目にかかりたいものだ。
そしてお礼を言おう。

ティーレの実をありがとございました、と。

05 宰相

そのとき、コンコンコンというノックの音がした。

その音にフラウが「入れ」というと、大きな扉が開いて一人の人物が入ってくる。

しずしずと歩くその人は柔らかい感じの美人さんで、なんだか知的な雰囲気を感じ出していった。

年は20代後半くらいで、銀色の髪は長く背中あたりで1つに纏めているようだ。

前髪の左から一割くらいを左胸の前で筒のような装飾品で留めて、その他の前髪は右側へ流して目の下あたりで切り揃えられている。近くまできて立ち止まった美人さんの瞳の色はすみれ色だった。

よく見れば不思議なことに毛先は空色に見える。毛先2〜3センチほどが空色で、あとは徐々に銀髪に溶けるように混じっていくような、まさにグラデーションだった。

散髪したらどうなるんだろう？

そこでふと思つてウオレスを見た。

赤茶と思つていたウオレスの髪は毛先がこげ茶色になっていた。わかりにくい……！

ということとは改めてフラウも見る。

ぼんやりした明かりのあの部屋で真っ黒と思つていた髪は、明るい場所では一目瞭然。実は紫紺で毛先は金だった。

お前ら何者なんだ。そうかここは異世界だったね。

いや、もしかしたら髪を切るたび染め直してるのかもしれないし。……うん。気にしないでおう。

ただ、綺麗だと思ふよ。

フラウが立ち上がったので、わたしもならって立ち上がる。

「ミナモ、これは宰相のリーフェス＝クラムベル・リフ、こちらは異界よりの客人、ミナモだ。」

フラウの手振りに合わせてお辞儀する。

「・・・よろしく。」

ぼそつと言った声は落ち着いた男の人の声だった。ただし背中にくるタイプ・・・いや、腰か？

初めてリーフェスさんの声を聞いた瞬間、何かわからないけど謝りたくなった。いろんなものに涙ながらに謝りたくなったのだ。そんな誘惑に耐えるように両手で骨盤をしつかりと押さえる。

「わ、わたしの名前は笠鷺みなも、19歳。性別は女。成績は中の上。剣も魔法も使えない、多少馬にのれるくらいの親兄弟親戚恋人なしの一般人でぶ。」

どうやらかなり混乱していたようで、フラウにした“心に決めた自己紹介”をしてしまったようだった。

しかも最後に思いきり噛んだし。

06 シール貼付、二人目

リーフェスさんとはばらく見つめあう。

透明な輝きを放つすみれ色の瞳に見つめられて、なぜか背中には冷や汗が流れた。

声もあれだけ目もあの感じがする。

泣いて謝りたくなるあれ。

気を抜いては座りそうになる体にぐつと力を入れて胸をそらす。

どれくらい見つめあっていたのか、ふいにリーフェスさんがこくりと頷いた。

そして小さく会釈を残して無言で部屋を出て行ってしまふ。

・・・な、なんだったの？

まさか見えない力でわたしの何かがわかってしまったとか？

よくわからなかったがそつと息を吐き出し振り返れば、うつすらと頬を染めて見上げるウォレスがいた。

どうしたお前。

やはり最初からおかしかったが、きっと今もおかしいのだろう。

少し可哀想になって、たぶん視線もそうなたはずなのに。

ウォレスはさらに頬を染めるとうつとりと・・・うん、見なかったことにしよう。

ソファに座りなおし、ティーレの実の残りを食べる。へたはすでない。

「では早速で悪いが緑の館に行ってくれ。家具も一通りは揃っているはずだ。定期的に手入れはしているが、気になることがあったらウォレスに言うか私に言ってこい。私は少し所用があるので同行は・

・ウオレス、いつまでも阿呆面を晒すな、みつともない。館までミナモを案内してやれ。」

立ったまま見下ろした形でそう言ったフラウが扉に向かう。

その背中に「フラウありがと」と言って手を振った。

手は見えてないと思ったけど肩越しに振り返ったフラウが左手を軽く上げる。

その所作は気品と慣れを感じさせて、やはり一国の王子を名乗るだけはあると思う。

見たところ中学生くらいなのに、命令し慣れた態度と口調はちゃんと王子様。

フラウが第三王子ということはフラウのお兄ちゃんがあと二人はいるということ？

あれ？そういえばみんなの年齢きいてないけど・・・ま、いつか。

見た目とあんまり差があるとは思えないし。

お城の外観はこのうえなくヨーロッパ調だった。

歩いた道のりはわたしには複雑で、あの部屋に戻れない自信がある。ウオレスに案内されて緑の館へ向かう途中、お城の廊下やお城の外でいろんな人とすれ違う。

その度に女の人がちらちらとウオレスを見ていた。

見た目のかつこよさは認めよう。

でもこの人は知ってはいけないものを持っている気がする。

見た目はいいのに・・・見た目だけは。

なんだか残念な気分でウオレスにも“鑑賞用”のマークの入ったシ

―ルを貼り付けた。

もちろん心の中で。

07 南区までの道のり

南区にある緑の館までもう少し。

この世界のひとたちなら一瞬で移動できるそうだけど、わたしには無理。なので町並みと道を少しづつ覚えなければならぬ。ちゃんと覚えきるまではウォレスが付き添ってくれるらしい。

「ウォレス、さんは・・・」

いけないいけない。つい呼び捨てにしそうになった。

いくらあんな宣言をされたとしても、年上そうなひとを呼び捨てるなんて。

「ウォレスとお呼びください。」

右手を胸にあてて、にこっと。

やや小首を傾げたその様子はまさに爽やかな騎士だった。

「じゃあわたしのことは、みなもと呼んでください。」

「そ、れは・・・できればご主人自身の名をお呼びしたいのですが・・・」

「???・・・あ!そうかそうか。えっと、まぎらわしくてごめんなさい。姓が笠鷲で名前がみなもなの。」

ということフラウは名前で呼んだのではなく、姓のつもりだったの?あの瞬間、ちょっとどきつとしたのに。少し剥がれかけていたフラウのシールをすっかり貼りなおす。うん、彼はいまも鑑賞用だ。でもよく笠鷲の“ぎ”と、みなもの“み”の境目がわかったな。たまたま真ん中あたりで区切ったら当たってただけか?・・・ま、い

つか。今度からこの世界で名乗るときは姓をあとに言わなくては。読んだ本の中にもそういうのあったのにすっかり忘れてたな。うーん、案外パニックだったのかもしれない。

「そう、だったのですか・・・申し訳ありません、てつきり・・・そうだ、あとで殿下にもお伝えしておきますね。」

少し気落ち気味にそう言ったウオレスだったが、セリフの後半を口にしたときの目が顔は笑っていたのにちよつと冷たかった。もしかしたらさつさと言つとけよ的なことを思ったのかもしれない。ごめんよウオレス。

「それにしてもウオレスはあんな初対面で、よくわたしの面倒みる気になったね？誰かのお世話するの好きなの？」

ふと疑問に思っていたことを口にする。

「いえ、別段ひとのお世話が好きなわけではありませんよ。俺の足を踏んだのがミナモ様だったからそうなっただけで、他のものなら斬って捨て、いえ、放置ですね。」

いままたしても幻聴が・・・うん、気にしない。わたしは何も聞かなかった。

ただ名前に様をつけられるって寒気がするほど恥ずかしい。でもこれを断ったら人前でご主人と呼ばわれるのか？どっちにしる恥ずかしい思いをするなら、もうこっちでいいのかも。

「わたしのことも知らないしフラウの紹介もまだの“どこの馬の骨とも知れない人間”だったのに？」

「ははは、ミナモ様が何者でもかまいませんよ。その踵が俺の足を踏んだのですから当然の成り行きです。」

・・・なにが？なにが当然なの？

大きく頷き満面の笑みを浮かべる顔からそつと視線をはずす。深く聞いているいけないと思う。

「えーっと、最初フラウは恐ろしい作り笑顔向けてきたよ？」

「それはまあ、フラウス殿下ですからね。それに人の上にたつものが初対面の人間を無条件で信じるようなことはしませんよ。」

「じゃあ、よくわたしのこと信じてくれたね。」

怪しい人間が寒いと言ったからってあんな素敵な部屋に連れてってくれるなんて。それとも無害に見えたのだろうか？ふーんと少し頷きながら、視線を下げて道に並んだ石畳を見る。

「信じたというか、それをいろいろ解決するためにあの部屋に移ったわけなんです。じっくり見て殿下も気づいたんでしょう。髪の色が単一で魔力がない人間はこの世界にはいませんから。俺もその髪に見惚れていて、すっかり距離をあけるのを忘れたおかげで足を踏まれてしまいましたし。」

ふふつとはにかんだ笑顔を向ける白衣の騎士。

もちろん後半は聞かなかった。ウォレスの扱いに少しは慣れた気がする。

それにしてもいろいろ解決って何？・・・さらつと言ってくれたけど、それはわたしが拷問でも受ける可能性があったということでは？魔力ゼロは正直残念だけど拷問に比べたらマシだったのかもしれない。

「そういえば部屋を移動したのって一瞬だったよ？どうしてウォレスは突然現れたわたしに驚かなかったの？」

「ああ、それはミナモ様が部屋を移ってくる前にフラウス殿下から連絡をいただいていたんですよ。“異世界人と名乗る人物が召喚の間にいる、今から連れて行く”とね。」

あ、もしかしたらあの移動の呪文と違っていたものがそうだったりしたのかも？そう思い出して、もう一つ疑問がわく。じゃあリーフエスさんは？あの部屋でフラウが何か呟いていたところを見たことはないから・・・電波か？テレパシーか？

「リーフェスさんは？リーフェスさんもタイミングをはかったみたいになんてやってきたけど・・・」

「たぶんメイドにティーレの実を持ってくるよう言ったときにも言伝たんでしょう。いくらあの宰相閣下でもそんな都合よく・・・まあ、あの方ならありえるかもしれませんが・・・」

そうなんだ、ありえるんだ・・・

先の読めない無表情と態度は宰相という役職にはもってこいだと思う。

でも宰相があれでこの国は大丈夫なのだろうか。他の国が泣いたりしないのだろうか？わたしが泣いて謝りたくなつたあの声と眼差しで・・・ああ、慣れか。

わたしもこの国で暮らすならあれに慣れるしかないのかもしれない。

08 緑の館

少し傾いた太陽を見上げる。

大通りを抜けさらにいくつか住宅街を通り抜けて、今度は高い塀を越えてまだ少し歩いたところに館はあった。振り返ったさきにあるお城はけっこう近い。おかしいな？かなり歩いたはずなんだけど・
・ま、いつか。

辿り着いた緑の館は「たしかに緑ですね」としかいえなくらい緑だった。

庭中を埋め尽くすのは鬱蒼と生い茂る樹木と草花で、家の壁一面には蔦が這いそれは青い三角屋根にまで到達してほぼ覆っている。窓もかろうじて存在がわかる程度で唯一無事なのは木製の扉だけ。なので外壁の色は全くわからない。

さまざまな濃さと色合いの緑が重なり、風に揺れる葉がさわさわと影をつくる。

緑の館は外張り断熱（特に夏）のエコで素敵なお家だった。

扉の鍵をあけたウォレスに「ありがと」と言うと、にっこり笑ってわたしの斜め後ろに下がる。その姿は騎士というより執事な感じになってきたような気がする。執事騎士か・・・うん、ウォレスならいけると思う。

これからわたしが住む家。この世界初めてのわたしの居場所。

ときどきして震える手でドアノブを握る。

棒状のドアノブをゆっくり下げると、カチツと音がした。

そっと押し開くと見える範囲が広がっていく。

木目の床と天井、壁はクリーム色だった。少しひんやりした室内に足を踏み入れる。

玄関と続くようにあった最初の部屋には四角いテーブルとイスのセットと低めの棚、隣の部屋には食器棚とキッチンがあった。来客があつたら一発で食事のメニューがバレルつくりである。

右奥の部屋にはトイレらしきものと、たぶんお風呂、に相当するものだと思う。使い方がわからないのでウォレスに・・・聞いていいのだろうか？うーん、ここはやはり女性に聞くべきだ、スルーしていいところじゃない。

反対側の部屋はやや大きなベッドと本棚と小さな丸いテーブルとイスが一脚だけだった。

見て回ったものは木製のものが多く、どれもけっこうがっしりした作りに見える。

夢中で見てまわり、最後に屋根裏部屋に上がる。

屋根裏は柱が数本あるだけのがらんとした様子だった。

ふと見た三角の壁にある窓から庭の様子が見える。

白い柵に囲われた緑の範囲がこの館の敷地っぽい。けっこう広い。間近にある窓のふちには細長いハートの形をした蔦の葉がたくさんある。この葉っぱ、じっくり見れば可愛いかも。

反対側の窓からはお城が見えた。やっぱり近いと思う。なんで？そのときウォレスが左側に立った。今までは一歩引いたところに立っていたのに。

「ね？歩くと遠いと思いませんか？俺と一緒になら一瞬ですよ。」

につこりほえむウォレス。イヤな予感がする。

「・・・もしかして遠回り、とか・・・した？」

窺うように見上げればウォレスは一段と笑みを深くする。

「・・・したのね？」

その笑みは肯定ととっていいんだと思う。

すっと伸びたウォレスの右手が引き攢る口元をかすめるように触れて、左耳の横の髪を掬う。まるで流れるような動きに一瞬驚き警戒する。髪をもてあそびながらウォレスはくすつとほほえんだ。ああ、とってもスルーしたい。

「俺はあなたの下僕です。もっと俺に頼ってください。ね？」

立候補ではなかったのか、お前。いつの間に確定したんだ。それにわたしは認めていない。そもそも下僕はこんなことしないと思うんだよ、ウォレス。これは女性を口説く気障男のポーズではないのか。さして暑くないけど午後の太陽にやられたのかもしれない。

わたしはウォレスを正気に戻すため考えた。そして、実行する。

「ウォレス、跪け。」

胸をそらし両手は腰に。顎をつんとあげ見下げるように。

その一言でウォレスは正気に戻ったようだった。さっと跪くと胸に片手をあてる。

ほんのり頬を染めてうつとり見上げるウォレスにハウスを言い渡す。

「いいから今日はもう自分家に帰れ。」

しっしと手で追い払う素振りをすればウォレスがぐらつとしたように額に手をあてて後ろに倒れそうな姿勢で止まる。器用だね。それにしてもほんとに残念な気分だよ、ウォレス。

ウォレスを下僕ではなく、犬と認識した瞬間だった。

09 生活費

ふう。と息を吐いて屋根裏の窓から夜空を見上げる。

夜空に浮かんだ月はオレンジ色に傾いた黄色で、見慣れたものよりは大きかった。

この世界にきてはじめての夜。

あのあとフラウが手配してくれた食材や食器などが届けられた。

日常生活を送るうえで必要そうなものをかたっぱしから。

中には出来上がった料理も含まれていて、その点はとても助かった。

ふう。物憂げに漏れるため息とともに庭に視線を落とす。

月明かりをあびる庭に建つ一軒の小ぶりな家。あのとき、なぜかそ
つちにも荷物が運ばれていた。

そして。

ハウスを命じられたウォレスはその家に帰ったのだ。

たしかにこの世界では距離の意味はないのかもしれないけど・・・
まだ悪い人がいないと決まったわけではないので、いざとなったら
助けにはなると思うし・・・ま、いつか。番犬がわりに。うっ！な
に今の考えは！？・・・うん、わたしったら疲れてるんだね、
今日はもう寝よう。

寝室に戻り、ベッドに潜り込む。短い時間だけど夕方まで干してパ
ンパンした布団は気持ちよかった。

翌朝、美味しそうな匂いで目が覚める。また料理を宅配してくれた
のかと眠い目をこすって起き上がり、玄関まで行こうとして・・・
キッチン前で立ち止まる。立ち止まらざるをえなかった。

・・・ウォレス。

なんでいるの？とかはもう聞かない。ウォレスだし。少し考えてこの世界で鍵は意味がないのでは？と思う。鍵がわりの魔法があるならいいけど・・・わたしには使えないから意味ないし。

背中を向け、ふんふんと鼻歌を歌いながら手際よく料理している赤茶の毛色を見つめる。

たしかにフラウが面倒みるといつてくれたけど、そのお金はどこから出てるのかはつきりしないうちはなるべく控えたい。もし下手でも料理ができるウォレスがいれば、この世界の料理を知らないわたしはフラウにたからなくても済むかもしれない。あ、でも食材はフラウもちか。あと、ウォレスにたかるのはやめよう。なんか怖いから。

うーん、どうにか収入を得なければと思うも、わたしにはお金になりそうな特技に心あたりはないし。はあ、あとでフラウに相談しよう。うん、そうしよう。

ウォレスと一緒に食べた朝食はウォレスお手製の野菜たっぷりスープと丁度いい焼き加減の魚と丸いふわふわパンだった。・・・とても、恐ろしく美味しかった。騎士なのになんでだ？

「おはよ、フラウ。」

「ああ、おはよう。」

朝食後、ウォレスに一瞬で連れてきてもらったのは昨日の部屋だった。たぶん。

フラウは大きな机の上を静かに片付けるとイスから立ち上がる。きつと仕事中だったんだ。ごめんね？机をまわりこんだフラウが近づいてくるのに合わせてわたしも近寄った。

「昨日ウォレスから聞いたが、ミナモは名だったのだな。悪かった。」

すつと下げようとする頭を慌ててやめさせる。

「あ！みなもでいいよ！それにいまさら姓で呼ばれるなんて、なんかちょっと・・・」

「・・・そうか、わかった。」

そう言っただけに笑ったフラウは年相応に見えて可愛かった。これを間近で鑑賞できるなんて　し　あ　わ　せ。

「今日はなんの用だ？さつそくあの館で足りないものでもあったのか？」

腕を組んで「ほぼ網羅したはずなんだが・・・」と呟き首を傾げるフラウに頭を振る。

「わたしの面倒みてくれてるのはありがたいんだけど、そのお金ってやっぱり・・・税金？」

そう聞くとフラウはちょっと驚いたようにわずかに目を見開いて、片手を顎にそえると思案するように視線を少し下げる。

「あー、そうであるといえるし、そうでないともいえる。あれは税金のごく一部をある条件で民に投資し、そのうち成功したものから

のみ割合に応じて返還されてできる余剰分だ。こうして増やしてさらに民に投資していくもので、ん？そうすると投資という点であなたがチナモも例外ではないな・・・異界ゆえの何かないか？」

良いこと思いついた！みたいにフラウにキラキラした目を向けられる。

「あ、う・・・ごめん。それはわたしも考えたんだけど、そういうの今はちよつと思いつかなくて・・・」

「ふむ。ではチナモがあのかたに住んでいる間は、あそここの管理人として国が雇おう。どうだ？」

フラウったらナイスアイデア！と思ったけど、はたと気づいた。

「でもそれじゃ誰かの仕事を横取りしてしまうんじゃないのかな？手入れしてたつて言つてたし、ほら、その管理人さんとか・・・」

「いや、それなら心配ない。手入れしていたといつても、手入れの度にメイドの中から都合のついたものを何人が向かわせて、それに手当てを出していただけた。手入れの内容は軽い掃除と補修部位の発見くらいで、彼らには普段の仕事があり給金も相応に支払われている。だいたい管理人自体いない。よつてこの仕事が必要なものは特にいないぞ。」

フラウにここまで言つてもらえたなら少しか甘えてもいいかな。できるだけでいいんだけど。

「うーん、じゃあお給料がわりに食材と少しの生活費くらいで、雇つてもらえる？」

ここでのお給料がどれくらいなのか見当もつかないので、ちら

つとフラウの様子を見ながらこれだけあればたぶん生きていけると
思ったものを口にした。

「まあ、お前がそういうならそうしよう。ただし、不足があれば遠
慮なく言ってこい。」

そう言ったフラウが机に向かいしゃらしゃらと何か書いていく。
最後にしゅっとペンを走らせると、一通り読み直してこちらに向け
る。

「確認しろ。」

わたしは紙を覗き込んで・・・少しだけ固まった。

10 勇者の存在

ごめん、読めないや。そう言おうとして後ろからかけられた声に振り返る。

「いつそ、どなたかと婚姻でも結べば手っ取り早いですよ。」

いきなり何てことを笑顔で言うのだ、ウォレス・・・

それに出会った翌日の朝で一体誰と結婚すると？

万人が魔力を持つこの世界で魔力ゼロのわたしと結婚して相手に得なんてある？

ほーら、わたしが誰かと結婚なんてありえない。むしろこの世界じゃ一生独身じゃないかな？ふふ。

手に持った紙をもう一度見て、やっぱり読めないことを確認した。

「ごめん、読めないや。」

てへ、とでも効果音をつけながら頬をかいてフラウに紙を返す。

返そうとしたわたしから紙を受け取らず、フラウはちらつとわたしの後ろに視線を向ける。それも2箇所。

何々？なんなの？わけがわからず後ろを振り返ろうとする前に両側に影ができる。

「結婚は俺としましょうね。」

「・・・識字は契約に必要。」

ぎょ！ひiiiiiiiiっ！声が声が！！

すぐ真横からのアノ声にぞわわわわとしてウォレスを蹴っ飛ばしてフラウの机の影にダッシュで駆け込んだ。アノ声の前に何か聞こえた気もするけど絶対わたしには聞こえなかった。

それにしても何の前触れもなくいきなりはキツイよ。

どつきんどつきんしながら、そっと机の横からあたりを探ろうと顔を出す。

ウォレスがなにやら悶えてるけど無視だ。

そんなことより今は・・・

「・・・まずはミナモ。」

「っ！」

真後ろからの声にわたしは文字通り飛び上がった。

慌てて机の影から飛び出し何かを踏んづけフラウのやや小さい背中にしがみつく。「ああっ」とか聞こえたが知るか！ここしか、ここしか安全な場所はないの！？

ぎゅゅとフラウの服を掴んで、机の向こう側でゆっくり立ち上がるリーフェスさんなるべく気配を消して窺う。まあ気配なんて消したことはないんだけど。

その様子にフラウが一つため息を吐いた。

「リフ、何か用があったのではないのか？」

フラウの言葉にしばらく止まったりリーフェスさんがぼん、と手を打った。

まっ、まさかの天然なのっ！どうしよう天然ボケ！？宰相が天然ボケ！??

すっと目を細め、威厳というか美人才ーラを取り戻すリーフェスさん。

「・・・隣の大陸で勇者が召喚されました。」

「勇者・・・またか、はあ。」

さも呆れたと言わんばかりに額に手をあてフラウは首を振った。

またか、って。またなんだ。勇者って珍しくないんだ・・・

でも勇者っていえば大抵は魔王を倒したり、って！魔王さま倒されちゃだめじゃない！ティーレの実だって魔王さまの研究成果なのに、その魔王さまが危ない！！

「フラウ！あの兼業農家魔王さまが危険なの！？」

がつくんがつくん揺さぶろうとしてあんまり揺れなかったフラウを見つめる。

「いや、ああ見えて魔王は強いぞ。ゆえに先代の勇者を破って不可侵を誓わせたんだが・・・」

ああ見えてって言われても会ったことないからわからないよ。
ん？そもそも何で隣の大陸の勇者がここの魔王さまを倒しに来るの？何も悪いことしてないのに。

「ねえフラウ、どうして勇者がこの国を攻めるの？魔王さまがいるから？」

「・・・言って、なかったか？」

「何を？」

「・・・ここは・・・魔族の国だ。」

そう言って僅かに目を逸らせたフラウを呆然と見つめる。

「・・・・・・・・・・」

え、ええええええーっ！？うつそ、ほんとにーっ！」

11 魔族の国

一応のつもりで驚いてみたが実感はわかなかった。

フラウが嘘や冗談を言ってるんじゃないことはわかってる。

ただ、魔族の国って言われても思い当たるものが何もなかっただけ。ふと思い返してみれば、緑の館に向かうときに感じたのは平和だった。

大通りでは子供たちがきゃっきゃとはしゃいでいて、通りに並んだお店では買い物カゴを持ったお母さんが野菜を買ってた。住宅街に入れば奥さま方が笑顔で井戸端会議をしてたし、高い塀にあった小さな門にいた門番さんはにこやかで、ウォレスをちら見してた人たちは頬を染めた普通の女の子たちに見えたから。

角とか翼もないし尻尾もない耳も尖ってない。笑った口から牙が見えたこともなかった。

わたしが出会ったのは、美形率が高めな気がするだけの普通の人々だった。

少しのんびりした気配に気づいたのかフラウが視線だけを戻してきた。上目遣いで。

うん。やっぱり美少年の上目遣いは良いね。

それをこんなにじっくり鑑賞できるなんてこの世界はなんて素晴らしいんだ！

・・・できることなら帰りたいけどこのまま永住してもいいかもしれない。

「やはり、恐ろしいか？」

ぎゅっと拳に力を入れたフラウが苦しそうに言う。

「・・・えっと、何が？」

間近でフラウの肌理の細かい肌を鑑賞していた視線を彼の目に向ける。

もしかして魔力のこと？わたしには無いから？

フラウたちが魔力があるだけの人間にしか見えないから何て答えていいのか迷う。

ふっと自嘲するようにほほえんだフラウはとても大人びて見えた。

「・・・我ら、魔族がだ。」

「え？何で？」

べつに酷いことされた覚えもないし住むとこだって貸してくれるしご飯だって面倒みてくれるのに？人間だってあんまりいないと思うよ？そう思ってたちょっと過去を思い出して頭を振った。

今のところ怖がる理由をさっぱり思いつかないよ。

「それ、は・・・今まで攻めてきた人間がそうだったからだが・・・」

わずかに眉間にしわを寄せ、困惑気味に体を引いたフラウの両肩をがっしりと掴む。

「魔族が暇つぶしに人間を襲ってるとか人間を食べてるとかしてないならわたしは怖くなんてないよ。むしろ好きだよ。大好きだよ。」

フラウの顔が。

覗き込むようにして熱心に言った言葉に、一瞬ぼかんとしたフラウの顔が瞬く間にピンク色に染まった。なんかわかんないけどこの顔も良いと思う。ということで“心のアルバム異世界編”に一枚追加する。

その間もじつと見つめあっていたフラウとの間に、すっと一枚の紙が差し込まれた。

それはさっきフラウが何かを書いた紙で、リーフェスさんのせいで失くした紙だった。

「改めて自己紹介したほうがいいんじゃないですか？」

声はウオレスだったのに、紙を持つ手はリーフェスさんのものだった。

なんでだ。

12 魔王登場

「アーベルエスト帝国第三王子フラウス＝リドルア＝アーベルエストだ。これからもよろしく頼む。」

紫紺の髪で毛先は金色。黒い軍服のような上下に黒いマントのフラウがマントの端を軽く摘んで片足を引くと、やや膝を曲げて腰から折るようには上半身をわずかに下げる。その動作につられて襟足だけ長い髪がさらりと流れた。

「こ、こちらこそよろしく願います。」

今までの感じとがらりと変わったフラウに少し焦って、どきまぎと拳動不審気味になってしまう。

すっと上げたフラウの顔にはかすかなほえみがあって琥珀色の瞳が煌いている。

そこから優雅に一步引いたフラウと入れ替わるようにして目の前に立ったのはウォレスだった。

「アーベルエスト帝国近衛騎士団団長ウォレス＝マーノスです。以後、お見知りおきください。」

赤茶の髪で毛先はこげ茶。白い騎士服に身を包んだ長身の男が片膝をつきにつこりと見上げてくる。普通にしていれば格好良いウォレスに、うっと体が止まる。

そこから自然な動作で右手を取られ手の甲に軽く口付けられた。とても、爽やかに。

「ヨ、ヨロシクネ・・・」

どうやら修行が足りなかったようだ。ほぼ慣れたと思っていたけどそれだけ言うのが精一杯で、こういう挨拶はどこかのお姫様にすればいいと思う。

どうにもそのままの体勢で笑みを含んだ青い瞳を見下ろしていることが居た堪れなくなり、意を決してそっと引き抜いた右手を今度は白魚のような手にさりげなく引かれる。

銀髪に空色の毛先。足元まである淡いすみれ色のローブには細かな模様が入っている。

隣に立ったリーフェスさんはさっきまでとは比べ物にならないほどの美人オーラを纏っていた。

「・・・アーベルエスト帝国宰相を与ります、リーフェス「クラムベルと申します。」

アレな声とアレな眼差しを間近で感じて慌てて腰を支えた。

右手を取られたまま、やや覗き込むようにして言われた言葉にぎゅっと目を瞑る。

これ以上は目の毒だと判断してのことだった、のに。ふと指先に感じた柔らかいものに驚いてはっと目を開けた瞬間、その光景を見てしまつて盛大に後悔した。

微妙に腰が引けた状態でコクコクとだけ頷く。うふふ、天然ボケでもさすが宰相。どうやらお仕事モードのリーフェスさんは逃げ道を塞ぐのが上手いようだ。

ああ見なかったことにしたい・・・そもそも一般人にここまでしてくれなくてもいいと思う。

それに三人の自己紹介、これのどこで魔族だとわかるというのか。一人もわからないよ。

予備知識がないとどう考えても魔族のまの字も出てこないと思うんだけど。

ゆっくり離された右手を庇うようにして左手で包む。

みんなの本気の挨拶の破壊力を身をもって体験したところで、リーフェスさんにも“鑑賞用”のマークの入ったシールを心の中で貼り付けた。

「勇者が召喚されたんだって？」

ノックの音と落ち着いた声に振り返れば、扉のところにいたのは一人のインテリメガネだった。

日に焼けたことのなさそうな白い肌にツヤツヤの黒い髪、毛先は赤紫がかっている。

年齢は30前あたりで、似合いすぎるノンフレームのクールメガネに白衣を着用。白衣の下は濃紺のシャツと黒めのパンツで全体的にほっそりした感じに見え、服装からいえば保健の先生か化学の先生。しかし、それを裏切る髪型だった。

下ろせば膝までありそうな長い髪をポニーテールにして、纏め部分で一回わつかを作って残りを垂らしている。まるでの字を縦に細長くしたような髪型だった。前髪は真ん中わけで、あごまでの輪郭を覆っている。

見るな！気づくな！と心の中で祈って気配を消す。じりじりとリーフェスさんの背中に隠れようとした。が、フラウたちに近寄っていた長い足が止まって、こっちを、見た。

ん？と首を傾げて・・・こっちに来たー！

二歩の距離まで近づいたノンフレームメガネの奥にあるのは凍えるような水色。

白衣はサドか鬼畜と相場が決まっているのだ。いくら美形でもできればお近づきになりたくない。

なのに少し屈むようにしてメガネが顔を近づけてくる。ふっ、長い

睫毛の確認などしたくなかった。

「ああ、この子が例の・・・僕は魔王、趣味は農作物の改良。よろしく、ミナモちゃん。」

なんで名乗ってないのにバレてるの？というか例のって何？もしかしてわたして噂の的？有名人？異世界から来た人とか？それとも魔力ゼロのほう？あらいやだ、そんな噂。フラグも立てられないわたしは魔力ゼロの一般市民として美形を鑑賞しながらひっそり暮らしたいんです。珍獣扱いを受けてこっちが観察されるのは欠片も望んでないんです。帰るまででいいのでスルーしてください。

そう想いをこめて穏やかな笑顔を向ける魔王さまを見返し、そっと頭を下げる。

「みなも 笠鷺です。はじめまして。えと、ティーレの実はとても美味しかったです、ありがとうございました。」

あまり頭を上げないで、すすすとリーフェスさんの後ろに平行移動する。

それを見た魔王さまの瞳が笑みのまま細まったのは気のせいではないはずだ。

ほんとにサドか鬼畜の可能性が高まって焦る。

心の中で、さっと“鑑賞用”と“要注意”のマークの入ったシールを二枚素早く貼り付けた。

13 帰還不能

「え？」

飲んでいた紅茶から顔を上げる。

今のが聞き間違いでなければわたしはとても重要なことを耳にしたはずだ。

隣の大陸で過去に召喚された勇者のその後。

「10年前に召喚された先代の勇者は今もこの世界にいて人間の城で隠居してるよ。彼が勇者をやめたのは僕を倒せなかったせいになってるけど、本当は元の世界に帰れなかったからなんだよね。」

長い足を組んで魔王さまはおっしゃった。

応接セットのソファに座ったわたしの正面にフラウ、右隣にウォレス。

右の一人掛けにはリーフェスさん、左の一人掛けに魔王さまが座っている。

「こちらに召喚することはできても帰す方法がない、ということですね？」

確認するようにウォレスが魔王さまに念を押している。

それに頷き返した魔王さまがこっちを向いた。

「君には気の毒だけど、僕も帰す術に心当たりがないんだ。悪いね・・・」

その心底残念そうな表情に帰れる可能性が限りなくゼロに近づいた

気がする。

でも魔王さまが知らなくても世界は広いのだ。

もしかしたら世界のどこかには帰る方法があるかもしれない。

そう前向きに考えていたのに。

「魔王はこの世界全ての魔法や魔術に精通している。彼が知らないならこの世界にはその方法は無いと言えるだろう。」

真面目顔のフラウにまで追い討ちをかけられた。

紅茶のカップを受け皿に置くと、はああとため息を吐いて頭を抱える。

帰れないのか・・・帰れない・・・思い残すことは何も無いとはい切れないけど・・・たしか貯金は4ケタしかなかったし。荷物は大家さんが何とかしてくれると思う。あんまり家具とか置いてなかったから掃除も簡単でそんなに部屋も汚してないし・・・あとは、あとは・・・そっか、これくらいか。

最後にもう一度だけ大きなため息を吐き出して顔を上げるとソファから勢いよく立ち上がる。

なぜかウォレスも一緒に立ち上がった。騎士だから？

「これからよろしく願います！」

それだけ言っただけで90度まで頭を下げる。

魔力もお金も何も持ってない今のわたしができるこれが精一杯の挨拶。

うん、こうなったら後でバイトでも探してみよう。

第一歩としてお皿洗いとかなら文字とか関係なさそうだし、それで少しずつでもフラウにお金を返して残ったらできるだけ貯めとこう。それに文字も覚えていかなくちゃ。帰れないなら読めないなんて言ってる場合じゃない。

「ミナモ・・・」

「ミナモ様・・・」

「・・・ミナモ。」

「ミナモちゃん・・・」

フラウもリーフェスさんも魔王さまもソファから立ち上がったみたいだった。

「そんなにしなくてもお前はもうこの国の民だ。安心しろ、私は民を見捨てたりしないからな。」

フラウの苦笑を含んだ声にそっと頭を上げる。

わたしとテーブルを挟んだ位置に立つフラウにリーフェスさんがあの紙を手渡してた。

「・・・現時点では四人も証人がおります。この場合直筆なら何ら問題はないかと。」

まさかこのままサインさせようというのか。

意味不明の書類にせめて文章を読んでくれないものかと思っていると、にこやかなウォレスと目が合った。そうだ、わたしにはウォレスがいたんだっただね。

「よろしければ俺が読んで差し上げましょうか？」

につこにつこしたウォレスに頼もうとして、ウォレスを見上げる。

「あれ？ミナモちゃんはこっちの文字、読めないの？」

不思議そうに聞いてきた魔王さまを振り返って頷いた。

「はい、今のところ読むのも書くのも無理です。」

魔王さまはわずかに首を傾げると「おかしいなあ」と呟き、顎先を指の背でゆっくり擦っている。

そして独り言のようにとんでもないことをおっしゃった。

「召喚陣の基本として文字の習得は必ず組み込まれてるはずなんだけど・・・もしかしたら君は召喚されたわけじゃないのかもね。」

・・・そ、そんな馬鹿な。わたしの気まぐれ異世界旅行記に終止符を打っただけでは飽き足らず、わたしの根本的存在価値にも終止符が打たれそうになっている。

「でもあの部屋は誰かを召喚する部屋だったんですよね？どこかの誰かが喚んだんじゃ・・・」

「だが、実際のところ召喚の間は現在立入禁止だ。」

フラウの硬い声に、“喚ばれてもいないのにやってきた魔力ゼロの人間”というシールを作る。

心の中で自分にぺたりと貼ると、力なくソファに腰を下ろした。

「・・・じゃあフラウはどうしてあの部屋にいたの？」

立入禁止ならあそこにフラウがいたのはおかしくない？

ぼんやりと問いかけるとフラウもソファに座りなおして真面目な顔で見つめてくる。

「あれは本当にただの偶然だったんだ。使用していないといっても

何らかの異変が起こる可能性はある。例えば今回のように。今まで無かったことだがこういうことがあったときに対応できるよう、月に一度私が空き時間に見て回っていたんだ。」

・・・なんということだ。召喚がフラウの点検が終わった後だった場合、わたしは確実にミイラではないか。

召喚の間を思い出し、がっくりと頂垂れたわたしに魔王さまが一步步近づいた。

「そのときの様子はどんな感じだったんだい？周りが光ったとか音がしたとか、何かなかったかい？」

どこか目を輝かせ興味津々に聞いてくる魔王さまは白衣と相まってどことなく危ない気がする。

まあ、モルモットのな意味なんだけど。

「あの・・・わたしがあの部屋に来る前の話ですけど、ぴっかーと光って、ららんらーと星が散ったようなキラキラしさを感じた覚えがあります。」

「光か、そのときフラウスにはどう見えてた？」

今度はフラウに顔を向けて魔王さまがソファの肘掛に腰掛ける。

「私には光の痕跡などは感じられなかったな。ただ気がついたときにはミナモが立っていただけだ。」

両肘を膝の上に置いて顔の前で指先同士を組んだフラウが真顔で答えて、数秒魔王さまと意味ありげに目を合わせる。

ぱっと魔王さまがこっちを見てどきっとした。うん、モルモットのな意味で。

「どうもミナモちゃんに何らかの力が働いたのは確かなようだけど、やっぱり人為的な召喚とは違うみたいだね。」

腕を組んで頷きながらそう言った魔王さまは白衣のポケットから手帳を取り出すとペラペラとページを捲ってそこにメモしている。

「僕の方でももう少し調べてみるけど、あまり期待しないでね。あ、そうだ。どちらにしてもこの世界にいる限り文字の読み書きは必要になるだろうから・・・そうだな、解読の魔法でもあれば楽なんじゃないかな。僕がかけてあげるよ。」

穏やかに微笑み、そう言ってくれた魔王さまをじつと見上げる。

あの時は外見で判断してしまったけど、もしかしたら魔王さまはサドでも鬼畜でもなくてただマッドなのかもしれない。趣味は農作物の改良って言うてたし、それって良く言えばみんなのためだよな。

そう思い直して改めて見てみると、ちょっといい人に見えてきた。

それに白衣とメガネを取って、髪を下ろして黒くて長いローブを着ればクールビューティーな魔王さまになりそうだな。

うん、戦うのは無理だけど鑑賞するならもってこいだ。

心の中では“要注意”のマークの入ったシールが剥がれかけていた。

14 魔法

「はい、終わり。」

魔王さまの少し冷たい手がそつと目元から離れて行く。

魔王さまに魔法をかけてもらったけど、目を閉じてた間も開けた後も特に変わった気はしなかった。

横を見ればなぜかリーフェスさんががつくりと肩を落とし、その隣ではウオレスが蹲っていじけている。

「・・・文字を教える手が触れてキャツ作戦が台無し。」

「ミナモ様にもつと頼られるはずだったのに・・・」

天然宰相さまの頭の中をちよつと覗いた気がするけど、うん、ほつとこう。

改めて紙を見て読めることを確かめた。

それはフラウの几帳面な文字が整然と並ぶ、雇用のための契約書だった。

内容は、緑の館の管理人として雇うかわりに食材と生活費を支給するというもの。

最後にフラウのサインがあつてその下にわたしの名前を書くところがあつた。

ときどきしながらペンを持つと、頭に書くべき文字が浮かんでそれを真似する。

名前を書き終えて、フラウに見せた。

「合ってる？」

サインをじつと見たフラウが口元を緩めて頷いた。

「ああ。それに綺麗な字だな。」

真似ただけの字を褒められたただけなのにちよつと嬉しい。
わずかにニヤつく頬で、顔を上げたフラウに照れ笑いを返す。

「ところでミナモちゃん。」

横からかけられた声に魔王さまを振り返る。

魔王さまはメガネをついつと直して、フラウをちらつと見た。

「君、鍵はどうしてる？」

鍵なんてこの一本きりだと思つて、緑の館の鍵を魔王さまの前に提示する。

それを見て魔王さまが「やっぱりね」と呟いた。

「君に魔力が無いのは知ってるね？それなら鍵の魔法も使えないということになる。」

魔王さまの言葉に3人がはつとした顔をした。

うん、気づいてたよ。

ウォレスが不法侵入したときにね。

でも何で不法侵入した本人がそんな顔するのよ。

あ、もしかして気づかれちゃった的な？

じつとウォレスを見ていると魔王さまが覗き込んできた。

「ついでに鍵の魔法もかけてあげるね？」

この世界での鍵の重要性がどの程度かわからないけど頷いた。

もしかしたら単に一瞬で移動できる先に指定できないだけかもしれない。

「誰か許可したい人はいるかい？」

許可？ということかと聞いてみると、許可された人は鍵の魔法を無効化できるというではないか。

つまり緑の館に入り放題ということになる。

「それじゃあフラウとウォレスをお願いします。」

二人ならまあいいかと思ってそう言つと、フラウはちょっと驚いたみたいでウォレスは輝かんばかりの笑顔になってた。

ふと、リーフェスさんと魔王さまがわずかに変な顔をしてるのに気がついた。

「・・・僕は、入ってないのかな？」

ん？と笑顔で首を傾げられて背中を何かが這い上がる。
するりと手の甲で頬を撫でたリーフェスさんはお色気全開だった。

「お、お二人もお願いします。」

一歩後退つて答えた顔は引き攣つてたと思う。

そして。わたしは求人広告を片手に、あるお店の前に立っていた。

『ネイヤ手芸店』

広告を見る。間違いない。

時給 700ウエン（昇給有り）

時間 10:00～17:00（休憩有り）

内容 縫いぐるみの製作

（時間・曜日応相談）

広告を握り締め、睨みつけるようにお店の扉を見た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6655m/>

終わりにから始まる物語

2010年12月3日10時30分発行